


<h1>指導資料</h1> <p>鹿児島県総合教育センター 令和3年10月発行</p>	<h1>学習指導 第1号</h1>		
	対象 校種	小学校 中学校 高等学校 義務教育学校 特別支援学校	

学びの価値を見いだす授業デザイン —児童生徒が「学びたい」と感じる授業の実現—

各学校における授業改善は、これまで「知識及び技能の習得」や「思考力、判断力、表現力等の育成」の観点から検討されることが多かったのではないだろうか。本資料では、児童生徒が学びたいという気持ちを育むこと、いわゆる「学びに向かう力の涵養」に着目し、児童生徒が学びの価値を見だし、「学びたい」と感じることができるような授業デザインの考え方を提案する。

1 はじめに

鹿児島県総合教育センターでは、令和元、2年度に、県内約1000人の教師を対象に主体的・対話的で深い学びの実現や育成を目指す資質・能力の三つの柱に関する調査を行った。



図1 「主体的な学び」が実現できていないと感じている教師の割合

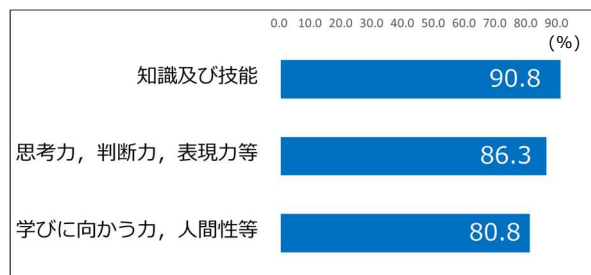


図2 授業づくりの際、育成を目指す資質・能力の三つの柱で特に意識しているもの

これらの結果から、鹿児島県の児童生徒は学年の進行に伴って、「主体的な学び」が実現されにくく（図1）、学習意欲の低下につながっていると考えられる。そのため、教師は「学びに向かう力、人間性等」の涵養をより強く

意識した授業づくりを心掛ける必要がある。しかし、図2を見ると、資質・能力の他の二つの柱に比べ「学びに向かう力」の涵養への意識が低くなっており、児童生徒の学ぶ目的意識や必要感の低下につながっていると考えられる。そこで、本稿では「学びに向かう力の涵養」に着目し、児童生徒が学びの価値を見だし、「学びたい」と感じることができるような授業デザインの考え方を提案する。

2 学びの価値を見いだす授業

(1) 学びの価値

児童生徒が学びに対して知的好奇心を抱くのは、その学びにおいて「学びに向かう力」が作用しているからである。その際、児童生徒は図3のような感情を有機的に絡み合わせたり、複合的に働かせたりして、向き合った学びに対する価値を強く実感することとなる。



図3 学びの価値

(2) 「学びに向かう力」を涵養するための
四つの視点

学びの価値を見いださせるためには、児童生徒の学びに対するモチベーション（動機付け）を一層高める必要がある。動機付けには外発的動機付けと内発的動機付けがあり、外発的動機付けによる学習は報酬や賞罰のための手段になってしまうが、内発的動機付けによる学習は知的好奇心を満たすという目的となり得ることが広く知られており、その心的要因やそれを意識した指導方法等についてこれまで様々な研究がなされている。これらを参考に、図4のように、「必要性」、「自律性」、「関係性」、「有用性」の四つの視点で、児童生徒に「学びに向かう力」を涵養する視点を整理し、児童生徒に感じさせることができる手立て、いわゆる児童生徒が主体的に関われるような手立てに入れ込み、積極的に授業に配するようになる。

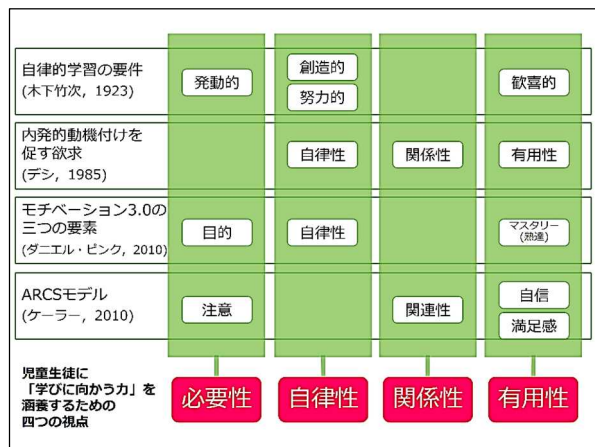


図4 先行研究と児童生徒に「学びに向かう力」を涵養するための四つの視点

ア 必要性

学習に動機を与え、必然をもたせる視点

目指す児童生徒の姿 「～のためにしている。」
「～する必要がある。」

「欲求が満たされない」、「自分は未完成だ」、「自分の力が及ばない」などと感じ、解決したい問いができたとき、児童生徒はこれまでの自分を突き破るべく、新しい学びに挑もうとする。そして、解決したい問いを追究しようとしたとき、自分自身にとって新しい学び

が発動する。このとき、学びに動機を与えるものが必要性を感じさせる手立てとなり得る。

(例) 実用的な必要性を感じさせる手立て

児童生徒に学ぶ必要性を見いださせるのに有効なのは、学ぶことで自分の日常生活がより豊かになったり、自分自身の資質・能力がこれまで以上に向上したりすることを感じさせることである。そのため、児童生徒が「役に立つ」と感じる学びを実現できるように、日常生活に結び付けたり、学習前後で比較したりできるような手立てが有効である。

(例) 知的好奇心を満たす手立て

学びは、その内容が複雑になるほど抽象化していく。そのため、児童生徒の学びが高まるほど、学びは何かの役に立つといった日常生活に直結した具体的なものだけでなく、「分からないことを知りたい、もっと知りたい」といった自身の知的好奇心を満たすものへと深化していくと考える。そのため、児童生徒が学ぶ過程で見いだした「解決したい」、「もやもやを解消したい」などの児童生徒の内面から湧き上がる欲求を満たす手立てが有効である。

イ 自律性

学習内容・方法を自分の意志で決められる視点

目指す児童生徒の姿 「自分で～している。」

私たちは物事を自己決定することで、物事をコントロールしているという自己満足感を味わうことができる。さらに、最後まで遂行しようとする責任感を抱くことができる。つまり、児童生徒が自分自身で決めるということに深い意味がある。また、教師が学ばせたいことと児童生徒が学びたいことを結び付けることは重要である。そのため、児童生徒が学びに対して肯定的に受け止めることができるように、児童生徒に学習内容や方法、考え方などの自己決定を促す手立てが効果的であると考える。

(例) 「選択させる」手立て

学習経験が少なかったり、解決の糸口を想起しにくかったりする場合、児童生徒は自ら考え活動しにくい。また、教師が学習内容や方法を細かく規定せず自由になると、児童生徒は混乱し、かえって難しく感じる場合がある。学習内容や方法、考え方などを実態に応じて児童生徒に「選択させる」ことで、ほどよい自律性を感じさせ、教師が学ばせたいことにつながりやすくなる。

ウ 関係性

知識及び技能同士を結び付け、自分の考えを広げたり深めたりする視点

目指す児童生徒の姿 「～が参考になる。」

知識及び技能や概念は、何もないところから創られることはない。学びにおいても、児童生徒は個人内に蓄積されている知識及び技能同士を結び付けようとするが、個人内の知識及び技能に蓄積されたものだけでは限界があり、他者が保有する知識及び技能と結び付けることで、自分にとって新しい知識及び技能や概念を生成することができる。さらに、これらのことを繰り返すことで、他者と関係をもって学ぶことに対して好意的になり、居心地のよさを感じるようになるのである。個人や他者が保有している知識及び技能を積極的に結び付ける手立てが必要である。

(例) 個人や他者が保有する知識同士を結び付ける手立て

私たちは新しい知識を生成する際、自身が保有している知識のみでは有効に生成できないことがある。そこで、新しい知識の生成に必要な知識を意識できるように、既習事項やそれらを活用した際の考えなどを想起させる手立てが有効となる。

また、児童生徒は教師のもつ知識や書物等にかかれている知識など、いわゆる確定している知識とつながることで、新しい知識を生成していくことが多い。しかし、児童生徒が今後予測困難な時代を生きていくために、確定している知識だけでなく、メディアやSNS、友達同士の意見交換なども含めた現在進行中の生きた情報など、いわゆる確定していない知識も活用させるような手立てを視野に入れる必要がある。

(例) 児童生徒一人一人の考えの変容を促す手立て

既得の知識の量や体験の違いなどから、一斉授業における児童生徒一人一人の学びは異なるため、児童生徒一人一人に最適化された学習が望まれている。そこで、児童生徒一人一人に解決したいことを考えさせたり、「自分の考え」を確実にもたせたりする手立てが重要である。

また、自分の学びを進めていく際、必要な知識は個人によって異なる。そこで、「自分の考え」の広がりや深まり（強固・付加・修正）を促す手立てが有効となる。

エ 有用性

学習に意味を見いだし、自分の資質・能力に自信がもてる視点

目指す児童生徒の姿 「なるほど～なのか。」
「～できた。」

児童生徒にとって実のある学びに至る学習過程は、解決したい問いに対して納得のできる結果だけでなく、その途中の価値や達成感、成功感、学びのよさなどを児童生徒に実感させ、解決したい新たな問いを見いだし、学びを連続させていくことにつながる。さらに、そのような学びは、遂行した自分の学習過程に対してだけでなく、学んできた自分自身に対してでも有用感を感じさせ、学ぶことに対して前向きにさせる。その結果、児童生徒を新たな学びに誘い、その学びに対して必要性を感じさせることにつながる。

(例) 遂行した学習過程における学びを測る手立て

児童生徒が学びの達成感や成功感、よさを実感するためには、自分自身が遂行した学習過程における学びを測る比較対象が必要である。そのため、単元及び1単位時間の学習を通して、「何が分かったのか、できるようになったのか」、「学びを通して自分の考えがどのように変容したのか」などについて、自分自身の学びを形成的、総括的に評価したり、個人内で絶対的に評価したりする必要がある。

3 学びの価値を見い出す授業デザイン

(1) 学びの価値を見い出す授業デザインとは「デザイン」とは「設計」や「意匠」という意味であり、つくられているもののつくられ方を意識している言葉である。授業でつくられるものとは「学習者の学び」であり、学習者とは児童生徒である。つまり、授業デザインでは、授業をする教師の立場ではなく、学習者である児童生徒の立場で考えることであり、テキストやプリント等の教材や板書等を使ってどのように教えるのかといった教師の「指導」を設計することだけではなく、図5のように、児童生徒が体験したい活動や自分自身で考えるための思考プロセスに必要な

ことを基にした児童生徒主体の「学習」を設計することである。



図5 学びの価値を見いだす授業デザインの要件の例

そのため、「授業デザイン」を画一的なものとして設定することは不可能であり、児童生徒の実態や学習内容等に応じて柔軟に変化させる必要があるため、教師はその都度最適化した手立て等を用いた「学習」方法を検討しなければならない。

これらのことから、学びの価値を見いだす授業デザインとは、児童生徒に「学びに向かう力」を涵養させるための四つの視点を踏まえ、それぞれの状況に応じた学習方法を設定するなど、児童生徒にとって最適な学習を設計することであると言える。

(2) 学びの価値を見いだす授業をデザインするに当たって

学びの価値を見いだす授業をデザインする際、授業の前だけでなく授業中や授業後に、学習内容や児童生徒の実態に応じて検討することは、より最適化した手立てを講じることにつながる。

さらに、授業デザインは児童生徒の実態等に応じて、単元や1単位時間の途中で変化するものである。そのため、児童生徒の実態を具体的に把握し、その都度、「学びに向かう力」を涵養させるための四つの視点を踏まえた手立てを授業に反映させていくことが重要である。これをPDCAサイクルで連続・発展させていくことで、学びの価値を見いだす授業デザインはより高次なものへと変化していくのである。



写真 学びの価値を見いだす授業デザインの考え方を基にした授業後の研修の様子

4 おわりに

学びの価値を見いだす授業デザインを行うということは、児童生徒に「学びに向かう力」を涵養する授業につながるだけでなく、私たち教師にとって、自分のこれまでの授業づくりを振り返る機会や視点の獲得につながる。つまり、自分の指導観、ひいては児童生徒観、教育観をも振り返ることができると思う。

児童生徒同様に、私たち教師も一人の学び手として、「学びたい」という気持ちを大事に、「学びに向かう力」を涵養しながら授業改善に対して真摯に向き合い続けていきたいものである。

—主な参考・引用文献—

- 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』平成28年
- 文部科学省『小・中・高等学校学習指導要領解説』総則編、各教科等編 平成29、30年
- 藤岡 完治 他『成長する教師—教師学への誘い』平成10年 金子書房
- エドワード・L・デシ、リチャード・フラスト『人を伸ばす力 内発と自律のすすめ』平成11年 新曜社
- ダニエル・ピンク『モチベーション3.0』平成22年 講談社
- 大島 純、千代西尾 祐司『主体的・対話的で深い学びに導く学習科学ガイドブック』平成31年 北大路書房
- 稲垣 忠『教育の方法と技術 主体的・対話的で深い学びをつくるインストラクショナルデザイン』平成31年 北大路書房

※ 教科等の特質に応じた考え方や授業デザイン例など、詳しい内容は次のURLを参照してください。
<http://www.edu.pref.kagoshima.jp/research/result/happyou/r02/top.html>

鹿児島県総合教育センターHP
 令和2年度調査研究発表会資料

